

## 『スラヴ吸血鬼伝説考』（栗原成郎）から観るロマン・ポランスキーの映画 *The Fearless Vampire Killers*

—映画 *Dracula* と *Horror of Dracula* と比較しながら—

藍 孟 昱

はじめに

1. ヨーロッパの吸血鬼文学と映画
  2. ポランスキー監督作『吸血鬼』における二項対立
  3. ポランスキー監督作 *The Fearless Vampire Killers* におけるスラヴ的要素
- おわりに

### はじめに

ロマン・ポランスキーは1962年の処女作『水の中のナイフ』*Nóż w wodzie*のあと、ポーランドから離れ、イギリスで3本の映画を制作した。その後、ハリウッドからのオファーを受け、1968年に『ローズマリーの赤ちゃん』*Rosemary's Baby*を制作した。イギリスで制作した3本の映画のうち、三作目の *The Fearless Vampire Killers* (1967) は吸血鬼のテーマを扱ったものである。それは、吸血鬼文学の最も栄えているイギリスにおいては大きな挑戦とも言える。しかし、吸血鬼信仰は古くからスラヴ世界に存在し、昔話や伝説や民衆詩歌などの民間伝承として、ヨーロッパにおける吸血鬼文学のイメージとは異なる様相を呈している。ポーランド出身のポランスキー作『吸血鬼』(*The Fearless Vampire Killers* のこと) は、初のコメディ要素を含んだ吸血鬼映画として、ジャンル性において斬新な作品と言える。ただ、この作品の意味はそれだけではない。欧米の吸血鬼映画に定着した吸血鬼＝ドラキュラの固定観念に対するアンチテーゼとしてのスラヴ的な吸血鬼の諸相がふんだんに盛り込まれている点において、この作品の意味はそれまでの表象メディアを通して形成された吸血鬼イメージを覆すという意味が含まれていると考えられる。

よって、本稿は、1931年の『魔人ドラキュラ』*Dracula* と1958年の『吸血鬼ドラキュラ』*Horror of Dracula* と比較しながら、栗原成郎の『スラヴ吸血鬼伝説考』を援用し、従来のドラキュラ＝吸血鬼に対するアンチテーゼとしてのポランスキー版『吸血鬼』の諸相を明らか

にすることを目的とする。

## 1. ヨーロッパの吸血鬼文学と映画

### 1. 1 吸血鬼小説とドラキュラ

18世紀の初頭、東欧の国々で頻発していた吸血鬼事件によって、1730年代にヴァムピリズム(吸血鬼信仰)が広がり、ドイツ語 Vampir、フランス語 Vampire、英語 Vampire という言葉が取り入れられ、吸血鬼は西ヨーロッパにおいて、神学及び医学的に論証されるようになった。<sup>1</sup> その特異な現象がヨーロッパの知識人の興味を惹き、18世紀末期に、東欧の民間伝承に着想を得た吸血鬼が主題として近代ヨーロッパ文学に登場するようになった。<sup>2</sup> 19世紀に入ると、吸血鬼文学が各国で盛んになってくる。<sup>3</sup> ヨーロッパのゴシック・ロマンティズムの潮流に合わせ、文学における吸血鬼は美しく描かれ、フォークロアの吸血鬼からかけ離れている。1819年4月、バイロン作とされていたが、彼の主治医であるポリドリによる小説『吸血鬼』*The Vampyre* を導火線に、ヨーロッパ大陸及びロシアの文学に吸血鬼のテーマを大流行させた。ポリドリは美しい女性の血を吸い栄養を摂って命を永らえさせ、月光で復活する吸血鬼を描いた。ポリドリ作『吸血鬼』は主題の神奇さ、主人公の神秘的な容貌、悪魔的性格に加えて、作者名に主人公の貴族的背徳性のイメージと結びつくバイロン卿の名を用いたため、爆発的な人気をよび、その年のうちに驚異的な速さで版を重ね、フランス語訳とドイツ語訳も出版された。文学だけでなく、音楽やオペラにおいても吸血鬼を主題とすることが流行した。<sup>4</sup>

ポリドリの『吸血鬼』に続き、ジェイムズ・ライマー作長編小説『吸血鬼ヴァーニー』*Varney the Vampire* (1847) とジョゼフ・ファニュー作『カーミラ』*Carmilla* (1872) が代表的な小説であった。とりわけ『吸血鬼ヴァーニー』における吸血鬼に関する設定は後の吸血鬼小説に大きな影響を与えたとされている。<sup>5</sup> 具体的には吸血鬼は呪いとして見られ、牙を持ち、犠牲者の首筋に牙を刺して血を吸う、吸血の傷跡を残す、夜は窓から侵入して眠る乙女を襲う、催眠術を駆使する、普通の人間のような飲食はできるが口に合わない、昼間も行動できる、人間の血は吸血鬼にとってエネルギーであるなどが見られる。<sup>6</sup>

1897年、イギリス作家プラム・ストーカー作怪奇小説『吸血鬼ドラキュラ』*Dracula* によつ

1 栗原成郎『スラヴ吸血鬼伝説考』河出書房新社、1991年、p.16-19。

2 仁賀各雄『ドラキュラ誕生』講談社現代新書、1995年、p.86。

3 同書、p.88。

4 同書、p.89-96。

5 Skal, David J. *Vis for Vampire*. New York: Plume. 1996. p.211.

6 G・G・バイロン、J・W・ポリドリほか『吸血鬼ラスヴァン：英米古典吸血鬼小説傑作集』夏来健次、平戸懐古 訳、東京創元社、2022年、p.77-128。

て、吸血鬼の貴族のイメージがより定着し、イギリスも吸血鬼文学の中心となった。<sup>7</sup> 小説はイギリスに侵入する吸血鬼ドラキュラと彼を討伐するヴァン・ヘルシング教授たちという二項対立の構造をとり、ドラキュラはトランシルヴァニアのカルパティア山地にある古城の城主であり、物腰穏やかな紳士の格好で登場し、ポリドリの作品から一貫して吸血鬼は美しい女性を狙う。小説はすぐ演劇化され、大人気を博した。20世紀に映画化が進み、とりわけストーリーカー原作を元にしたユニヴァーサル社による『魔人ドラキュラ』*Dracula*（1922）とハマ・フィルム社による『吸血鬼ドラキュラ』*Horror of Dracula*（1958）によって、吸血鬼といえば「ルーマニアのドラキュラ」というイメージが人々の間に定着し、ドラキュラが吸血鬼文学と吸血鬼映画の頂点となりつつ、吸血鬼ハンターであるヴァン・ヘルシングもキャラクターとして定着した。

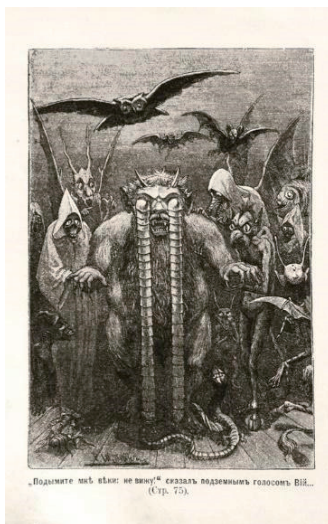
ストーリーカー作『吸血鬼ドラキュラ』によって吸血鬼に関する設定が確立された。例えば、1872年のジョゼフ・ファニュ『カーミラ』は、まだ吸血鬼による犠牲者が死後吸血鬼となり増殖していくという考えがなかったのに対し、『吸血鬼ドラキュラ』において、血を吸ってから自分の血を分け与えることを通じて種族を増やすという設定が加われ、吸血鬼文学においては初めてのことである。そのほか、ドラキュラは、自分に惹かれる者（血が吸われた女性）を遠方から影響を与える催眠術のような力と、夜間に蝙蝠や狼など自由自在に変身できる能力をもち、霧に伴って現れ、他人の家に一度招かれたことがあれば自由に出入りできる。十字架（Crucifix）など神聖なものとニンニクを忌避し、日光に弱く、昼は暗い場所で故郷の土の上で休憩しなければならない。吸血鬼は影がなく、鏡にも映らないゆえ、吸血鬼を識別することができる。そして、吸血鬼を完全に消滅する方法は、木の杭で心臓に打ち込むことである。吸血鬼ハンターヴァン・ヘルシングの吸血鬼退治法として、聖餅や wolfbane、ニンニクの花、十字架（Crucifix）、木の杭が使われる。<sup>8</sup>

## 1. 2 ドラキュラ映画の古典

映画史に残るストーリーカー原作の最初のドラキュラ映画は、1922年ドイツのプラナ・フィルムによるサイレント『吸血鬼ノスフェラトゥ』*Nosferatu – Eine Symphonie des Grauens* である。著作権を取得できていなかったため、人物名と地名は変更されたが、ストーリーとセリフは原作に従ったものとされている。1925年に映画のネガとプリントが廃棄処分と決定されたが、イギリス映画協会が著作権の保有者に懇願したことでネガを残し保存がされ、1928年にロンドンで限定鑑賞され、アメリカのユニヴァーサル映画会社に別のヴァージョンでフィルムが買われた後テレビで放映された。その画像から見ると、『ノスフェラトゥ』はストーリーカー原作の貴族のイメージから離れ、むしろウクライナの「ウィイ」の形象に似ていると考えられる。

7 仁賀、前掲書、p.106。

8 プラム・ストーリーカー『吸血鬼ドラキュラ』平井呈一訳、創元推理文庫、2008年。

図1<sup>9</sup>図2 ゴーゴリ『ウイイ』挿絵<sup>10</sup>

正規的なドラキュラ映画の第一作として、1931年2月、アメリカのユニヴァーサル社製作、ベラ・ルゴシ出演の『魔人ドラキュラ』が公開され、以降のドラキュラ映画のスタイル、および原作にふさわしい紳士の格好をしている具体的なイメージを持ったドラキュラ像が確立された。映画は制作費用を抑えるため、1924年の原作を改作した演劇をもとにしたものであり、原作の物語から離れ、主な登場人物を6人に絞った。物語はイギリスの弁護士レンフィールドがドラキュラ城に馬車で行くことから始まる。彼はトランシルヴァニアの貴族ドラキュラにロンドンで土地を購入したいという理由で招かれ、ドラキュラ城周囲の村で乗り換える時に村人に止められたが、村人からもらった十字架を持って城に行き、最終的にドラキュラの下僕となり、ドラキュラのロンドンへの侵入に協力した。ドラキュラはロンドンでセワード博士一家と知り合い、セワードの娘ミナの友人ルーシーを狙い、血を吸って死なせた後、ミナの血を吸い始めた。ミナはドラキュラに影響され、ドラキュラを庇うようになる。そこで精神病院に入れられたレンフィールドを調査していたセワードの恩師ヘルシングが訪れ、鏡にドラキュラの姿が映らないことから彼は吸血鬼だと判明し、ミナを攫ったドラキュラを、ミナの婚約者ハーカーと追いかけた。ドラキュラ城の地下墓所で、ヘルシングは棺の中で眠るドラキュラを見つけ、棺の蓋を壊して木の板を得て、ドラキュラの胸に打ち込んで殺した。ドラキュラの死と同時に、ミナの体調は回復した。この映画では吸血鬼に関する設定を忠実に再現した。ドラキュラは故郷の土から離れられず、十字架と wolfbane から避け、コウモリに変身でき、霧を引き起こし、そして催眠術を駆使して乙女の部屋へと侵

9 上記のスクリーンショットはF・W・ムルナウ監督による映画『吸血鬼ノスフェラトゥ』からのスクリーンショットを参照する [DVD: F・W・ムルナウ監督『吸血鬼ノスフェラトゥ』IVC,Ltd. (VC) (D) 発売、2011]。

10 Гоголь Николай Васильевич. Вий : повесть : иллюстрированное издание. 3-е изд. Санкт-Петербург, 1901. <https://elibrary.tomsk.ru/purl/1-1237/> より引用する。

入する。映画はドラキュラの視覚的な恐怖を描くために、俳優の目元をライトで強調しており、この手法は後に58年の『吸血鬼ドラキュラ』にも見られる。<sup>11</sup>

1958年イギリスのハマ・フィルム社による『吸血鬼ドラキュラ』*Dracula*では、クリストファー・リーが演じたドラキュラ伯爵は新たなドラキュラ像を見せた。『魔人ドラキュラ』で見られる変身のような非現実的な描写は排されるが、激しい音楽とカメラワークがなされ、冒頭シーンから画面外から血が垂れる場面が見せられインパクトが強められている。イギリスの古城をロケとし、歴史を感じさせる重厚なアートデザインがなされ、ドラキュラは登場時は紳士のように振る舞うが、吸血鬼だと明らかになるや否や、血まみれの口と長い犬歯、怒りによる赤い目を持つ非人間的な描写がなされる。吸血鬼は人間に扮するという意味合いが読み取られ、より吸血鬼の恐ろしさが伝わる。吸血シーンでは凄烈感と女性のエロティシズムが描かれた。そして、この映画で初めて、吸血鬼を殺すための木の杭が予め作られ用意されるという設定が組み込まれる。

『吸血鬼ドラキュラ』の物語も原作との間に差異が多い。吸血鬼ハンターのハーカーが図書館管理員を担当するために馬車でドラキュラ城にやってくる。ドラキュラは親切にハーカーを歓迎するが城内に一人の女性が突如現われ、ドラキュラに監禁されているとハーカーに助けを求めた。ハーカーはすぐに城の異常を察知し、女性にも吸血される直前にドラキュラが現われ、二人が吸血鬼であることが判明する。ハーカーは用意してきた木の杭で女性の吸血鬼を殺したが（死んだ瞬間に女性の顔は老婆の顔へと変わり果てた）、女性の悲鳴にドラキュラは目覚め、ハーカーの血を吸って殺害した。数日後、ハーカーを探しにドクターヘルシングがルーマニアのクルジュ＝ナポカにやってきて、旅館に大量のニンニクの花が掛けられていることに気づき、旅館の娘からハーカーの日記を受け取った。ヘルシングがドラキュラ城に到着した時、城から棺を運ぶ馬車が出て来る。ヘルシングはハーカーの婚約者ルーシーの写真が消え、ハーカーが吸血鬼に変わり果てたことを認め彼を木の杭で殺した。ドイツのカールシュタット在住のアーサー・ミナ夫妻は妹ルーシーの婚約者の死を知り、病氣療養中のルーシーには知らせずにおくと決めたが、ルーシーはすでにドラキュラに遭遇しその犠牲となり支配された。ヘルシングはルーシーの治療にニンニクの花と十字架を用いたが、支配されたルーシーは自ら治療具を拒絶し、再び吸血され死亡が確認されたものの、三日後に彼女が吸血鬼になった状態で現れた。ヘルシングは十字架でルーシーを退治し、木の杭で彼女を解放した。ヘルシングとアーサーはドラキュラの棺を探し回るが、ミナがすでにドラキュラに支配され、ドラキュラ城まで攫われていた。2人を追ったヘルシングは日の出を利用してドラキュラと戦い、二つの燭台で十字を組んでドラキュラを日光の当たるところに誘き出す。ドラキュラは光を浴び灰と化し、同時にミナは回復し十字架による傷跡も消えた。<sup>12</sup>

11 DVD：トッド・ブラウニング監督『魔人ドラキュラ』ジェネオン・ユニバーサル発売、2012年。

12 DVD：テレンス・フィッシャー監督『吸血鬼ドラキュラ』ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント発売、2015年。



両作品を比較すると、『魔人ドラキュラ』においてドラキュラの人間世界へ侵入する理由は新しい領地を獲得するためだが、『吸血鬼ドラキュラ』では殺された吸血鬼女性の後継者を探するため、ハーカーが残した写真をきっかけにルーシーを狙った。このような乙女への執着はボリドリの『吸血鬼』に遡ることができ、ヨーロッパの吸血鬼文学に一貫していると言える。また、前者は船を使ってロンドン進出を実現するが、後者はドラキュラ城の出入りに馬車のみ利用された。前者で強調されたドラキュラの催眠と変身能力、鏡に映らないことを、後者は一切言及せずに、代わりに①人間が吸血鬼による吸血に依存し、自発的にドラキュラが存在を黙秘する；②十字架の威力を強め、吸血鬼の犠牲者は十字架に触れるとその部分の皮膚が火傷を負う；③吸血鬼は日光に当たるとその部分が無機質な灰となるというオリジナルの設定を加えて描いた。火傷と灰の関係は興味深い。ヘルシングは、吸血鬼になったルーシーを木の杭で殺そうとアーサーを説得する際に、そのセリフ “It's only a shell, possessed and corrupted by the evil of Dracula! To liberate her soul and give it eternal peace, we must destroy that shell for all time!” から見れば、吸血鬼は邪悪や悪魔として見られ、人間の体は殻のようなものであり、悪に占領される限り、魂は安らぎを迎えられないことが分かる。それ故に、憑依する本体である吸血鬼が殺されると、冒頭における女性の吸血鬼は本来の老いた顔に変化し、ルーシーが吸血鬼に取り憑かれていた時に負った十字架の火傷が消え、聖潔な安眠の顔に戻り、ミナの手ひらにあつた火傷も消える。光藤 (2004) は<sup>13</sup>、(『ドラキュラ』は) 善 (神) と悪 (魔) の戦いであり、十字架を恐れるドラキュラは元キリスト教徒だったと指摘し、林 (1991) は<sup>14</sup>、原作におけるドラキュラ退治対策となる「徴候」と「証拠」物件は、その起源に神と悪魔の闘いが示され、(原作において) キリスト教徒ミナの額に捺される烙印は、かつてヘルシングがドラキュラの額に聖餅でつけたのと同じであり、神に見放された者の呪いの徴であると指摘した。一方で、映画においてドラキュラは目の前の十字を避けるために背後の日光に晒されてしまい、その人間の殻が火に焼かれたように無機質な灰となることから、十字架と日光の退治効果は同様であると考えられる。以上のことから、原作における聖餅などのキリスト教的な要素を採用していないが、映画『吸血鬼ドラキュラ』はキリスト的な善 (神) と悪 (魔) の二項対立を取り入れていると考えられる。

## 2. ポランスキー監督作『吸血鬼』における二項対立

1967年のポランスキーの『吸血鬼』はストーカー原作を元にしたドラキュラ映画に比べて、キリスト教的要素から乖離させる傾向が見られ、ドラキュラ映画でワンシーンしか

13 光藤俊夫 (2004) 「十字架を恐れたドラキュラも元はと言えばキリスト教徒だった」学苑 (769)、p.128-129。

14 林完枝 (1991) 「契約、接触、コロニー：『ドラキュラ』の徴候的読み」人文研究43巻8号、p.672-673。

かったルーマニアの村人や旅館を、ポランスキーは映画全体の半分も用いて描いている。

物語としては、吸血鬼の研究に没頭する教授アブロンシウスと助手アルフレッドは、吸血鬼の故郷とされるトランシルヴァニアにある小さな村に辿り着き、宿を取る。その屋根の下に大量のニンニクが吊り下げられているのに気づき、教授は吸血鬼について村人に訊ねるが、何か隠すような素振りが見える。助手は宿屋の主人ヨイン・シャガールの娘、サラに好意を抱く。ある朝に、一人せむしの醜い男が宿屋を訪れ、宿屋の女中マグダはすぐ隠れるが父親に部屋に閉じ込められたサラは気づかれる。その夜、クロロック伯爵という名の吸血鬼はサラを攫いに来た。ヨインは娘を連れ帰るために城に向かうも、血が吸われきった死体となって戻ってきた。教授と助手は彼の吸血鬼化を防ごうとするも手遅れで、ヨインは吸血鬼となり、曖昧な関係を持っているマグダの部屋に侵入し、彼女を犯して城に逃げる。助手と教授は雪の上に残された足跡をたどり城に乗り込み、伯爵と息子の同性愛者ハーバートが彼らを招き入れる。アルフレッドはハーバートに求められるが鏡にハーバートの姿が映らないことを認め吸血鬼だと気づき、間一髪で逃げ出し、途中で合流した教授と砲台が設置される城壁に辿りつく。そこで城の墓所を発見し、二人は城が吸血鬼の巣であることを突き止める。そこに伯爵が現れ、二人は伯爵に砲台に閉じ込められる。年一度の集会（舞踏会）には、城の墓所から出た大量の吸血鬼が一堂に会する。伯爵はそこに美しいサラを披露、墮天使ルシファーのもとで吸血鬼の群れを拡大するに当たって一年の成果を発表する。教授とアルフレッドは大砲でドアを壊して舞踏会に乗り込み、ホールにある鏡によって三人は人間であることが露呈する。サラを救出し三人は城からの脱出に成功するものの途中でサラは吸血鬼に変わり果て、アルフレッドに噛み付く。馬と橇を操る教授はその事態に気づかず、こうして吸血鬼は世の中に蔓延っていく。<sup>15</sup>

つまり、『ドラキュラ』に見られる神と悪魔の二項対立のほかに、ポランスキーはスラヴ人の庶民的な吸血鬼を導入し、ヨーロッパ吸血鬼文学の世界とスラヴ民間伝説の世界を融合させることによって、今まで吸血鬼と人間の対立しか存在しなかった世界観に、貴族と庶民の二項対立が新たに出現する。階級の下に従って、ヨーロッパ的吸血鬼とスラヴ吸血鬼を対照的に描き、吸血鬼に対する認識の原点回帰を図っていたと言えよう。

まず、貴族と庶民の性格は対照的である。クロロック伯爵と彼の息子は優雅な貴族の形象、いわば「ドラキュラ的な」吸血鬼のイメージを援用し、同時に悪魔信仰をもち吸血鬼の群れを拡大し、上位者であるからこそその世界征服という壮大な野心も抱えている。それに対し、宿屋の主人ヨインは、人間である時に猥褻で陰険であり、娘サラが攫われたときに一人で救いに行った勇敢な父親の側面があったが、吸血鬼になった後は城にいる娘はこれからも自分と同じ吸血鬼になるのだと覚知し娘を救出せず、自分の欲に突き動かされ、宿屋に戻って若き綺麗な女中マグダを襲って血を吸い、今後自分の居場所となる城に連れ込む。つまり、家族を作れば満足するという利己的で、俗的な性格が強調されている。

15 DVD：ロマン・ポランスキー監督『吸血鬼』ワーナー・ホーム・ビデオ発売、2010年。

次に、寝床の位置によって階級の差を表現している。ヨインは新しい吸血鬼で、人間社会の村に居場所をなくし、属する世界を探さなければならない故に城に行くと考えられる。昼のうちに吸血鬼は棺に入って休む。ヨインは新しく作った棺を、伯爵と彼の息子の豪華な棺の置いてある清潔な一階の部屋に引いて寝ようとするが、使用人に城の外側にある、低めで、環境の悪い馬小屋にまで追い出される。伯爵たちの棺は安全な高い土台に置かれるのに対し、ヨインは地面に置かれる棺に入って馬と共に寝る。他の上流階級の吸血鬼は城の墓地で広く深い棺の中に冬眠する。

図3<sup>16</sup>

ヨインが船に乗るように、棺に乗って階段を滑り降りていくシーンが注目すべき場面で、終盤において類似した滑り落ちるシーンもまた使われる。棺に乗って博士3人を追いかける吸血鬼の下僕が崖に落ち、狼に食べられるという悲惨な結末を迎える。

そして、映画の終盤に、上流階級は城の高層階という温暖な室内で舞踏会を行い、ヨインは血を過剰に吸われ死んでしまった女中マグダの死体を運んで階段を降り、寒い室外の墓地の棺に入り込む。このカットも色合いで城の上層部と下層部の差を表している。



図4

映画は吸血鬼と人間の対立も描いた。女中マグダと娘サラは最終的に人間から吸血鬼に変わるが、城に連れられた時に2人は吸血鬼を恐れず、上流階級に憧れるだけであった。しかし、彼女たちが人間から吸血鬼になると、その位置関係の変化が描かれ、従来のイギリス式貴族階級吸血鬼の「上位」のイメージが引き落とされた。女中マグダは人間であった時に、宿屋の屋根裏の部屋が彼女の寝室であり、血を吸われきると死体が城の下層部に運ばれ、地面に沈む棺で寝かせられる。サラは博士と助手に舞踏会から連れ出され、下層部にある馬小

16 以降、本文ではロマン・ポランスキー監督による映画『吸血鬼』からのスクリーンショットを随時参照する [DVD: ロマン・ポランスキー監督『吸血鬼』ワーナー・ホーム・ビデオ発売、2010]。



屋まで降り、馬車に乗って丘の下まで一気に滑り降りる。その過程でサラは息を絶えて吸血鬼に変貌する。スラヴ世界において、吸血鬼とは生きている人間に危害をもたらすグロテスクな生きものであり、人間と死者ははっきり区別されることが望まれる故、吸血鬼のような生と死の境目を曖昧にしたものは人間と対立的な姿勢を取るのが一般的である。よって、上から下という位置変化に伴って人間が吸血鬼（亡霊）と成り果てる描写は、従来の吸血鬼の「上位」というイメージを覆していると考えている。

### 3. ポランスキー監督作 *The Fearless Vampire Killers* におけるスラヴ的要素

ポランスキーはドラキュラ映画における吸血鬼の設定をいくつか取り入れていることが分かる。まず、同じく吸血鬼研究者のキャラクターを取り入れ、吸血鬼クロロック伯爵は乙女しか狙わず、吸血鬼は鏡に映らないことなどである。『吸血鬼ドラキュラ』はニンニクの花を使用するが、ポランスキーはニンニクそのものを利用し、スラヴ民間伝説と一致する。ドラキュラ退治のための十字架と木の杭は、ポランスキーも使用しているが用法が異なり、そこからスラヴ的要素が見て取れる。

#### 3. 1 帰還の目的は夫婦生活

前述のように、ドラキュラは血を与えることによって種族を増やす。一方で、栗原によると、スラヴ民間伝説では、全ての人が死後吸血鬼になりえるが、この世に未練、または不満や遺恨を抱いて死んだ人が最も危険である。<sup>17</sup> 吸血鬼とは「生ける屍体」であり、肉体をとって墓から帰還し、生きている人間の血を吸ってその生命力を奪う死者のことである。<sup>18</sup> 帰還の目的として、ヴーク・カラジッチの『セルビア語辞典』（1818）と『セルビア民衆の生活の習慣』（1867）における民間伝承における吸血鬼の特徴には、吸血鬼になった死者は、自分の妻のところに現れて妻と寝る、特に妻が若くて美しい場合というのがある。<sup>19</sup> つまり、死者の帰還の目的の一つは夫婦生活を続けるためである。それはヨインの行動と一致していると言える。

映画の冒頭に、宿屋の主人ヨインと女中マグダの曖昧な関係が描かれている。妻が熟睡した後、ヨインは軒をかいている醜い妻に嫌悪感を示し、こっそりとマグダの寝室を訪ね、ブロンドで繊細な美しいマグダを求めようとする。死んだヨインの死体は宿屋の1階のテーブルに置かれ、夜中に吸血鬼に変わり果てる。杭を打とうとする教授と助手から逃れ、すぐマグダの部屋に入ろうと窓から忍び込んだ。その後ヨインは、吸血鬼の世界でも家族を作るために、城で富裕な生活を過ごさせるとマグダを誘惑し城に連れて彼女を吸血鬼に変えようと

17 栗原、前掲書、p.31。

18 同書、p.27。

19 同書、p.26。

した。つまりヨインにとって、マグダは理想の妻の像であったため、彼女を自分と同じ世界に引き込んだ。吸血鬼ヨインの帰還の目的はまさに理想の夫婦生活を実現しようとしたところにある。

### 3. 2 杭で心臓を貫く際における悲鳴

ドラキュラ小説と映画において、木の杭は吸血鬼退治の手段であり、吸血鬼が木の杭で打ち込まれる際に悲鳴をあげる表現がなされる。スラヴ世界でも同様に、吸血鬼や悪霊は刺を恐ると信じられ、山査子の杭で吸血鬼を刺し貫く方法は古くから全てのスラヴ族に共通する方法である。<sup>20</sup> 杭を心臓に打ち込むと、血が噴き出す、あるいは死体の口から悲鳴が漏れるという記録が数多く残っている（例えば吸血鬼アーノルド・パウル事件はそうである）。また、セルビア西部の都市ポジェガに伝わる吸血鬼にまつわる話では、杭を頭部に打ち込むと、頭から火を吹き、大砲を撃ったような轟音を立てたと言われている。<sup>21</sup> しかしスラヴ世界では、屍体を焼却することが唯一の吸血鬼の息の根を止める方法だと信じられている。<sup>22</sup> 栗原は、「古代スラヴ人の死生観によれば、人間の靈魂は成長力のあるもので、血液と心臓と筋肉と内臓に結びついており、これらのうちのごく小さな部分でも存在している限りは生き続ける」と述べている。<sup>23</sup> 吸血鬼も同様である。吸血鬼は肉体を得た死霊であるゆえ、骨を持たず、肉体は不滅であり、わずか少しでも残存していると復活できると信じられている。ポランスキー版『吸血鬼』も木の杭の使用が見られるが、実際には吸血鬼を殺すことはなかった、言い換えると、吸血鬼は木の杭で殺されるという認識が証明されなかったのである。

その代わりに映画においてハンマーで杭を叩き込むと血が噴出するか悲鳴があがるシーンが3箇所もなされた。



図5

- 20 同書、p.48。  
 21 同書、p.104。  
 22 同書、p.50。  
 23 同書、p.50-51。

1箇所目は、血を吸われきったヨインの死体を見ると、教授と助手はヨインの妻に吸血鬼化の予防法として杭を心臓に打ち込むことを促したが、妻は愛する夫の死体を傷つけることを拒み、教授と助手は夜に自らの手で行おうとする。実行の前には部屋で枕を使って練習する。2回目の打ち込みで、教授の手に当たってしまい、彼は悲鳴を上げる。しかし、このシーケンスは影で見せた後に枕を使った練習シーンだと示すことで、枕の影と教授の悲鳴は実際は、スラヴ吸血鬼伝説にある、死体とその声を表現している。



図6

そして2箇所目は、吸血鬼になったヨインを地下貯蔵室まで追いつめ、二人は布をかぶっている大型の荷物をヨインだと思い込み、胸だと思われる場所に杭を打つと、血のような赤い液体（ワイン）が噴き出し二人を濡らす。この箇所もスラヴ伝説と対応する。民間伝説において、噴出する血の量は、牛の皮で杭を打ち込む人物の顔を、打ち込む対象である死体の返り血を防がねばならないほど大量である。



図7

3箇所目は教授と助手が伯爵によって砲台に閉じ込められた時に見ることができる。教授の発案により、砲弾と雪とマフラーを大砲に詰め込み、砲身を加熱。尾栓を叩き込み、水蒸気の力を利用し大砲を発射させ、ドアの破壊に成功する。尾栓を叩き込むシーンはカットで強調され、発射の轟音も、杭を吸血鬼の心臓に打ち込んだときにあがる悲鳴と同じ構造である。件のポジェガの伝説にある大砲の比喻と一致したのは興味深い。

### 3. 3 馬を利用して吸血鬼の隠れ場所を確認

ドラキュラ映画では馬車を使用し、ドラキュラ城から馬車の出入りさえ描かれた。しかし、スラヴ信仰において、吸血鬼を識別する占術的方法として、黒い雄鶏と黒い子馬（アルバニア人は白い雄馬）は霊能力のある動物と見做されて利用される。鶏は墓を選び、馬は吸

血鬼の眠る墓に近寄らないのである。<sup>24</sup> ポランスキー版『吸血鬼』には類似するシーンが見られる。



図8

映画の中盤に、ヨインの足跡を辿って教授と助手はそれぞれスキー板を着用して城に向かった。目的地に近づくとスキー板を外し、助手は板を雪に刺そうとするがなかなか立たない。教授はスキー板を後ろに放り投げ雪の斜面に捨てると、素早く丘を滑り落ちていった。このシーンは1つのカットで強調されていることから、ここは上述した吸血鬼を追跡する手段としての馬の換喩であると考えられる。言い換えれば、目の前に見える吸血鬼の城に近づくスキー板は、吸血鬼の墓に近づく馬という構図を変換した表現であろう。

### 3. 4 十字架の退治効果

ドラキュラ映画における十字架の吸血鬼退治効果は、ポランスキー版『吸血鬼』に否定さえされた。吸血鬼になったヨインは女中マグダの部屋に侵入する時、マグダは木の十字架を持って退治しようとしたが、ヨインは“Have you got the wrong vampire!”と自分には十字架は効かないと告げた。ここでは明らかにスラヴの吸血鬼とヨーロッパ的吸血鬼を区別していることが分かる。



図9

その反対に、ヨーロッパ式吸血鬼には、十字架は退治の効能があることを示している。映

24 同書、p.47-48。



画の終盤に、ホールから逃げ出した博士ら3人は追撃を遅らせるために2本の剣を十字に組んで吸血鬼群を怯ませた。貴族の吸血鬼たちは明らかに十字の形に恐れ慄き、追撃に躊躇する。この方法は『吸血鬼ドラキュラ』における燭台で組んだ十字を連想できる。しかし、明らかに十字の退治効果は両作品において大きく異なる。注目すべきことに、博士たちは十字で吸血鬼群を後退させるのではなく、十字（cross）に組んだ二本の剣をそのまま床に置く動作である。十字の形は画面の中心を占め強調されている。



図10

キリスト教における十字架信仰は贖罪論と結びついていると考えられている。<sup>25</sup> ドラキュラ原作と映画において、ドラキュラは悪魔と見做されている故、十字架や聖餅などキリスト教的要素が魔除けの道具としての効果が強調された。しかし、十字架の呪術性は従来のものではない、むしろ異教との習合からきている。『神話・伝承辞典』によると、6世紀まではキリスト教美術の中にシンボルとする十字架はほとんど現われていない。3世紀のキリスト教の神父ミヌキウッス・フェリクスは木の十字架を崇拝する教徒に対し、異教徒の行為だと咎めたという。キリスト教の受容に伴って現地宗教や土俗信仰との対立が常に見られる。<sup>26</sup> 野口（1990）によると、カトリック改宗後のガリアで、教皇グレゴリウス一世の597年9月の書簡で、キリスト教徒の多くがいまだ悪魔信仰を捨てていないと言及している。その異教的伝統には、十字路（cross）に座り込むこと、岩、泉、樹木、囲い地と十字路のところで灯明をあげて祈願すること、または泉、樹木、道の分かれたところに護符を貼ることが挙げられる。<sup>27</sup> 一方で、栗原によると、スラヴ世界における吸血鬼の退治法として、死者の帰還を防ぎ、来訪を不可能にする方法が考案された。死者はしかるべき儀礼で葬らない限り帰って来てしまうと信じられ、埋葬儀礼に様々な方法が試され、死者に帰り道を迷わせ、または手足を縛り、首を切り落とし、何かの傷をつけて置き、首筋あるいはみぞおちに釘か針か山査子の杭を打ち込むような、死者の行動を制限する習慣がある。<sup>28</sup>

言い換えると、十字架に対する信仰という発想は異教由来のものであり、異教における十字 cross は、具体的にいえば道の分岐などを示唆している。スラヴの吸血鬼信仰においては

25 平松洋『ドラキュラ100年の幻想』東京書籍、1998年、p.198。

26 同書、p.199-204。

27 野口洋二（1990）『メロヴィング期ガリアにおける異教的伝統とキリスト教』早稲田大学研究科紀要第36輯

28 栗原、前掲書、p.42-43。



吸血鬼に道に迷わせるという方法が採られているが、それはキリスト教のような十字架の持つ意味合いではなく、従来の異教信仰における十字路によるものであると考えられる。このような民間信仰から、十字 (cross) と木の杭の退治効果はヨーロッパ文学における吸血鬼退治法と根本から異なることが分かる。よって、ポランスキー版『吸血鬼』における床に置かれた十字は、十字路に対する呪術信仰を想起させ、吸血鬼に人間世界への道を迷わせ墓に戻ることにしかできなくなるというスラヴの吸血鬼予防法と一致すると考えられるであろう。それゆえに、のちに吸血鬼群はその道を通れなくなり、別のルートを探す場面が見える。

### 3. 5 吸血鬼の増殖とペストの蔓延

ドラキュラ小説において、吸血鬼の増殖はドラキュラが自分の血を与えない限りでは犠牲者を吸血鬼にすることができないという意識的な行為となっている。伝染性の吸血行為は女性の肉体のみと結びついていること故、林 (1991) は、「吸血行為を隠喩的に性交渉に見立てている」と指摘し、<sup>29</sup> 汚れた血は接触感染の業病として遺伝のように伝わるという「純血種」という幻想を脅かす異族間・異種間交配への恐怖」が読み取れ、世紀末イギリス社会の外来者恐怖症の徴候を示していることを明らかにした。その反対に、18世紀初頭に、東欧・バルカンで吸血鬼事件が頻発した時期は、同地域での黒死病などの疫病が流行した時期と一致し、吸血鬼現象とペスト流行を類推的に結びつけた啓蒙主義の知識人がいたにもかかわらず、スラヴの民衆も黒死病の病原を擬人化し、その疫病神のイメージが吸血鬼のイメージと重なり合うことがあるという。<sup>30</sup> つまり、スラヴ民間信仰では、吸血鬼は病原菌伝染のように広がっていくものである。ペストやコレラは吸血鬼に擬せられ、黒死病の流行は吸血鬼の仕業だという考えは多くの地域から見られる。ウクライナ地方の伝説において、ペストをもたらず元凶は女吸血鬼 (upiorzyca) とされている。<sup>31</sup>

ポランスキー版『吸血鬼』の結末で、助手は吸血鬼化したサラに嘔まれ、ナレーションで吸血鬼が橇に連れられて世界中に蔓延すると告げる。ここの表現は、吸血鬼とペスト流行の関連性を暗示していると考えられる。貴族吸血鬼は世界征服を夢見るが、長年古城に囚われて進歩あるいは拡大していないのに対し、スラヴの女性吸血鬼は種族の増大を果たしたという結末から、ペストを女性の疫病神として擬人化するという共通的なスラヴ的発想を想起させつつ、<sup>32</sup> ユーゴスラヴィアの俗信に疫病神を背負って世界中を歩き回らせられるという全スラヴ的な民話的モチーフとの繋がりも見られる。疫病神を背負って世界中を歩き回らせられるという構図は、映画において女吸血鬼を橇に乗せて外の世界へと走るという形で表されていると考えている。このように、スラヴ民間伝説に特有なペスト＝吸血鬼と女性の疫病神の要素が合わされ、映画の終盤で表現されたと言えるだろう。

29 林完枝、前掲書、p.666-670。

30 栗原、前掲書、p.145-146。

31 同書、p.148。

32 同書、p.148。

#### 4. おわりに

以上、本研究はヴァンパイアという名称がヨーロッパ文学へ登場することから始め、吸血鬼古典となる小説と映画における吸血鬼のイメージの創出と変化をまとめた。そして、栗原成郎著『スラヴ吸血鬼伝説考』を参照し、従来の吸血鬼像と比較しながら、ロマン・ポランスキーの吸血鬼映画 *The Fearless Vampire Killers* における吸血鬼像を解明した。ポランスキーは映画にヨーロッパ的吸血鬼とスラヴ的吸血鬼を登場させ、今までの吸血鬼映画にない世界観を作り上げたものの、ヨーロッパ的吸血鬼の「上位」にいるイメージを変え、スラヴ世界において一般的な吸血鬼（生と死の間にいる曖昧的でグロテスクな存在）と人間（生者）の対立的な姿勢を強調した。映画における吸血鬼に関する描写において、馬で吸血鬼の隠れ場所を暗示することや、吸血鬼退治に使われる木の杭と十字の起源、ペストとの関連性など、いくつかのスラヴ民間伝説的な要素が読み取られ、ポランスキー版『吸血鬼』は吸血鬼に対する認識を原点に回帰させたと言えるだろう。

